

# 希望

チューリッヒ日本人学校便り

平成 27 年 12 月 14 日 発行

第 32 号

発行人 校長 鈴木史良

## 寄生虫から広がる世界

—— 興味が膨らんだ松本淳先生による寄生虫の講話会 ——

12月11日(金)の午後は、特別授業として、本年度2回目の講話会を開催しました。講師にお迎えしたのは、本校の保護者でもある松本淳氏です。氏はチューリッヒ大学の寄生虫学研究所で客員研究員として研究活動されており、今回、本校からの依頼に特別に応えてくださいました。

『寄生虫』というと、私の世代ではまず人の腸内にすむカイチュウやギョウチュウのことが頭に浮かび、毎年検査があった小学校時代を思い出しました。当時は、現代に比べると衛生環境が悪く、学級の何人かは薬を飲む必要があったのです。

しかし、今回の松本先生のお話はたいへん奥深いものでした。これまで動植物レベルだった生態系についての認識が『寄生虫』

の世界にふれることでミクロの世界まで広がった、というのが私の素直な感想です。『寄生虫』といっても原虫、吸虫、線虫、条虫、昆虫、ダニ類とさまざまに分類されるそうです。ほとんどの寄生虫が宿主(寄生する動物等)に栄養やすみかを依存し、両者は共存しているので悪さはしませんが、なかには悪さをする寄生虫もあります。

例えば、熱帯の怖い病気、マラリア。この病因は蚊によって媒介されるマラリア原虫という単細胞の寄生虫です。この寄生虫は人の赤血球に取りつき、血球内で分裂・増殖して人に高熱をもたらします。現在でも年間2億人が発症し、40万人が死亡するという怖い病気の原因が寄生虫だったと知り、驚きました。

また、線虫の例ではアニサキスやフィラリアがあります。アニサキスは魚の体内に住む『寄生虫』ですが、それが寄生した魚を生魚として食べると、人の胃の中に入り込み、胃の壁に突き刺さって激痛が走るそうです。この場合は、内視鏡を使って、胃の中に刺さったアニサキスを除去しなければなりません。また、フィラリアはアカイエカ等が媒介し、犬の心臓に成虫が寄生すると心臓の働きが弱まり、体液が腹部に溜まるようになります。

そういう寄生虫のなかで、松本先生が主に研究されているのが、エキノコックスという条虫です。人を宿主としてエキノコックス症という病気を発症させます。スイスはエキノコックスの流行地なので、要注意と言えます。エキノコックスは、まず幼虫がネズミの肝臓に取りついて宿主とします。そのネズミは動きも鈍くなり、キツネの格好の餌になります。それを捕食したキツネが新たな宿主となり、

キツネと共存しながら、今度はそのキツネにふれた人に取りついていきます。このように寄生虫は宿主を選びながら、生態系のおおし、食物連鎖等をとおして、宿主から宿主へ旅



松本先生と講話に聞き入る子どもたち

をしていきます。ただ、人が宿主になると、肝臓で癌のように増殖していくので、手術で寄生虫の部分を除去する必要があります。スイスでは年間20～30人がエキノコックス症になっているそうです。キツネだけではなく、ネズミを食べたイヌからも感染することがあるそうなので、いっきに身近な心配事となりました。

日本でも、ネズミ、キタキツネ等の媒介により、北海道でエキノコックス症の発症があり、それにより旭山動物園のゴリラが死亡したそうです。愛らしいキタキツネの50%がエキノコックスをもっている！ 考えただけでも恐ろしいですね。

## 「寄生虫に学ぶ **One Health**:人と動物の健康はひとつ」

今回の松本先生の講話テーマは上記のものでした。ここに、先生がいちばん強調されていた『One Health』という言葉があります。聞きなれない言葉ですが、これから人類が健康を保っていく上でカギを握る言葉だと思いました。調べてみると、人に病気をもたらす病原体1400余りのうち、61%もの病原体が、人獣共通感染性であると英国の学者から指摘されたのが2001年のこと。その後、WHO(世界保健機構)からも、「過去10年間にわたって人が感染した新興疾病の約75%は、動物または動物産品由来の病原体が原因になっている。」とその重要性が叫ばれるようになりました。このような人、動物、環境の複雑な疫学構図で起きる感染症等の発生に、人の衛生、動物の衛生、環境の衛生(保全)に関与する関係者が連携、共同して対応しようというのが「One Health」であるとされています。人と動物の衛生が密接に関連していることが感じられます。私たちの健康と疾病をより幅広く理解するためにも、人の衛生、家畜の衛生、野生動物の衛生を統合的に学ぶことが必要になってくるわけですね。これは地球の環境問題、食糧問題、経済問題など、世界の生活基盤にかかわる大きな問題につながっているように思います。

## 将来の夢についてどんどん話そう！

松本先生は、講話の終わりに、どうして研究者になったかという話をしてくださいました。先生は自然豊かな福島県会津若松市で生まれ育ち、部活(バスケット)に夢中になっていたそうです。その部活を引退する時期がきて進路で悩んでいた時に、部活仲間から「獣医になりたい。」という言葉が聞きました。その言葉に強く影響を受けたそうです。友達に自分の夢を話すこと。それが将来実現するかどうかは別問題で、その時の希望や願いを口に出してみるのです。自分の夢を語り合うと、お互いに刺激し合うことができ、それがきっかけとなって本当に実現する場合もあるのです。

また、松本先生は「好き」「おもしろい」という気持ちを大切に、ということをおっしゃっていただきました。つらいことがあっても、自分の好きなことは頑張れるし、長く続けていくことができるからです。まさに“初心忘るべからず”に通じます。

最後に、「できる人がみんなのために行動しよう。」と呼びかけてくださいました。人はさまざまな社会環境の中に暮らしていますが、自分のやっていることが、『みんなのために役に立つ』と感じると、更にやる気が増して、どんな困難でも克服することができます。

このようなすばらしいお話を聞かせてくださった松本先生に感謝申し上げます。